

第1回 小金井市産業振興プラン策定委員会 議事録

日 時 令和3年7月29日(木) 午後6時～午後8時

場 所 小金井市役所本庁舎3階第一会議室

出席委員 9人

委員 長 中庭 光彦 委員

副委員 長 斉藤 浩 委員

委 員 森 文香 委員 清水 薫 委員

田中 千鶴枝 委員 西川 亮 委員

大坪 正直 委員 今井 啓一郎 委員

鴨下 勇司 委員

欠席委員 2人

委 員 高松 結花 委員 山城 裕路 委員

事 務 局 市長 西岡 真一郎

市民部長 西田 剛

経済課長 高橋 啓之

産業振興係長 鈴木 拓也

産業振興係主任 津田 理恵

株式会社国際開発コンサルタンツ 氏原 茂将

傍聴者 2人

議事

1. 開会(午後6時)

2. 委嘱状交付

机上にて委嘱状を交付した後、市長よりあいさつを行った。

西岡市長 緊急事態宣言下の中だが、重要な委員会なので開催させていただいた。委員を引き受けいただき、参加いただいたことお礼申し上げます。小金井市産業振興プランは、産業の将来像や数値目標を定め、これまで様々な施策に取り組んできた。昨年度改定する予定であったが、新型コロナウイルス感染症が流行したことから、その影響を考慮した計画とするために改定を延伸した。現在の状況を踏まえプランの検討をお願いしたい。また、検討過程の中で、みなさんの間によいつながりが生まれればと思っている。

産業振興プランは、長期総合計画を最上位計画として、小金井市の根幹をな

す基本計画のひとつである。小金井市が活気あふれるまちとして、また持続可能なまちとして発展していくためには産業振興をする必要がある。現在、策定中である長期総合計画においても産業・観光振興の目標を掲げており、その目標を実現するためのプランである。自分もまちの活性化を望んでおり、いまも多くの魅力がある。「あるもの磨き」をしていくことが大事である。また、様々なチャレンジする市民や事業者を応援することも大事だと思っている。小金井市のにぎわい創出のため活発な審議をお願いしたい。

3. 委員紹介

委員並びに事務局が自己紹介を行った。

4. 委員長及び副委員長の選出

事務局より、中庭委員を委員長に、斉藤委員を副委員長に推薦し、委員からの承認を得た。中庭委員長・斉藤副委員長があいさつを行った。

中庭委員長 全国的にみて元気になっていく地域は、年代にかかわらず、ざっくばらんに意見を言い合って、試行錯誤をしているところである。逆に、人口が減らないために危機感のない地域は、コミュニケーションが活性化せず、うまくいかない。小金井市の産業振興は大きな変化を迎えている。ネット化とサービス化の中で、みんなが稼ぎ、支え合うことに向けて議論をしていきたい。

斉藤副委員長 会議は堅苦しくなく、楽しい雰囲気、中身の濃い議論を心掛けたい。計画書は薄くても、肝心なところをつかんだ内容にしていきたい。

5. 協議依頼

西岡市長が、中庭委員長に小金井市産業振興プラン原案の策定について依頼した。

6. 小金井市産業振興プラン策定委員会の運営方法等について

事務局が、資料4を用いて委員会の運営方法について説明を行った。運営方法のうち議事録について、発言者の発言内容ごとの要点記録を事務局が提起し、委員からの承認を得た。

7. 議題

(1) 現行プランの取組状況報告

事務局が、資料5を用いて策定スケジュールについて説明を行った。事務局が、資料6を用いて現行プランの取組状況について説明を行った。

中庭委員長 現行プランの取組状況について、何か質問等あるか。

今井委員 エリアブランディングとは何か。

事務局 東小金井駅周辺は市の創業支援センターK0-T0のほか、民間でも創業支援の

機運が高まっていることを踏まえ、創業支援をまちのブランドとして一体的にPRしている。それをエリアブランディングと呼んでいる。

今井委員 各事業の成果と課題はどのように決めたのか。
事務局 毎年度、施策マネジメント評価を行っている。自己評価ではあるが、それに基づいて成果と課題を整理した。

今井委員 自分の知っている事業については成果があるという評価に疑問を持つものもある。

中庭委員長 その事業は具体的に何か。

今井委員 KO-T0 は市が設置した施設だが、その他の創業支援施設は民間事業者が設置している。それを行政として評価することには疑問である。行政の事業という認識なのか。また、それら施設は盛り上がっているが、周辺商店街への波及効果が感じられず、もったいないと感じている。

清水委員 学びとの連携が困難だったという課題が挙げられているが、具体的にはどのような課題か。

事務局 現行プランでは、小金井市内に学びに関する産業を増やそうという意図があった。そこで、事業所誘致を目的として都内の教育事業者にヒアリング等を行ったが、市に移転するほどの展開は困難という結果を得た。

中庭委員長 学びに関する産業はどのようなものを想定していたのか。

事務局 学習塾や通信教育等の事業者をイメージしていた。

西川委員 進捗評価の中で、市民農園・体験農園は増えていると書かれているが、数値は減っている。どちらが正しいのか。

事務局 新規に開園する市民農園がある一方、閉じている園もある。数としては増えているが、新しく開園するものは面積が狭いため、面積では減少する結果となった。

(2) 新プラン策定の方向性について

事務局が、資料6を用いて新プラン策定の方向性について説明を行った。

中庭委員長 次回以降、本格的な議論をすることになるが、現時点で何かあるようなら意見をいただきたい。

私から発言する。資料には抽象的な言葉が多い。例えば、資料に書かれていないが具体的には商店街の事業承継の問題もあると思うが、それは「創業者を中心とした市内事業者の育成・支援」に含まれるのか。

事務局 事業承継の課題は認識しており、「商工業の活性化」の中で取り組んでいく予定である。

中庭委員長 社会経済的な状況の変化としてコロナ禍を好機とすると書かれているが、飲食・サービス業はソーシャルディスタンスを維持するためにキャパシティを減らさざるをえず、売上を伸ばすことが難しい状況である。コロナ禍を好機

- とすることは、どの程度まで捉えるべきか。
- 事務局 小金井市は吉祥寺駅と立川駅に挟まれているため、買い物客は両駅に流れていた。ただ、コロナ禍において実施した市民アンケートでは、地域で過ごす時間が増えているという結果を得ている。そのような状況を活かしたいという意図から記載している。
- 中庭委員長 もうひとつ社会経済的な状況の変化として、商、工、農、観光の連携が挙げられている。観光ではマイクロツーリズムという言葉が騒がれているが、観光は宿泊や飲食と絡めないとお金が落ちない。観光振興と商業振興は区別して捉えるべきか。
- 事務局 小金井市には宿泊施設もなく、また観光資源も多くはない。来街者を増やすということを観光振興として位置づけ、商業分野での施策に取り組んできた。そのため観光と商業は一連のものと捉えてもらいたい。
- 中庭委員長 来街者の増加を目指すものであるという認識でよいか。また、そうであれば、滞在人口率という指標にかかわるのか。
- 事務局 そのように認識されたい。
- 田中委員 指標が3つある。年間小売販売額は数字を得やすいと思うが、まちに活気があると感じる市民の割合はどのように把握するのか。
- 事務局 毎年度、市民を対象としたアンケート調査を行い、把握する予定である。
- 今井委員 これまでの取組の成果・課題のなかに、工業に対する支援のあり方が書かれているが、市内工業の顧客は市外在住者である場合、支援する必要があるのか。また、市内商業者を卸先としている場合は、市内商業者を盛り上げた方がよいと思う。市内工業の事業の内容を把握した方がよいと思う。
- 事務局 何かをやりたいと思っている個人や団体が、それができるように支援する必要があると認識している。
- 中庭委員長 イノベーションをする人が増えてほしいということだと認識した。新しいビジネスを起こす人が増え、波及効果が起きることはよいことだと思う。
- 今井委員 工業については市外から稼ぐ事業者なのかも確認した方がよい。また、雇用されている人は商業主の顧客でもあるので、従業員数も把握した方がよい。その2点について、各事業所について整理してもらいたい。
- 事務局 以前、あきないクラブという取組があった。おもしろい市内事業者のトークなどをしていた。ビジネスにつながらなかったかもしれないが、そのようなおもしろい個人を盛り上げる取組も、ぜひプランに盛り込んでもらいたいと思う。
- 齊藤委員 あきないクラブでは、当初、核になってくれる人を各商店会から推薦してもらったが、時間が経つにつれて参加しなくなっていった。ただ、新しく参画してもらえることもあった。たとえば市内の小さな名所を探したところ、女性に

参画してもらえようになり、その後、おもしろいことも起こった。ビジネスにつながるという落としどころは見通せていなくても、おもしろい個人を市が応援するということがあつていいと思う。

中庭委員長

あきないクラブは、もう実施していないのか。

斉藤委員

メンバーが高齢になってきたので、続かなくなった。

中庭委員長

若い世代であらためて始められるといい。全国の事例を見ると、そういったチームがある地域は、うまくいくことが多い。80～90年代にまちづくりにがんばった人たちから、次の世代に続かないという意見を聞くが、世代がつながった地域はうまくいく。

斉藤委員

次回委員会までに、コロナ禍で市内に滞留している市民の数を把握してもらいたい。武蔵小金井駅の乗降客数は3.5万人減っていると言われている。ただ、周辺自治体からバスでアクセスする人もいるので、バス利用者の減少が把握できれば、市民だけの数字が分かるのではないか。

中庭委員長

小金井市民の交通分担率もデータとして押さえてもらいたい。

西川委員

市民アンケートを用いて、市内に目を向けるようになった人たちの属性を把握してもらいたい。市内商業を支える人の層が分かってくると、きめ細かい戦略が立てられるのではないか。

また、コロナ禍の状況は変化していくことを踏まえ、アンケート調査を継続的に実施する予定はあるか。

事務局

継続的な実施の必要性は認識しているが、具体的な頻度は決めていない。

中庭委員長

クロス集計を行う際の視点などを提起していただくほか、データ提供も柔軟に検討いただきたい。

事務局

承知した。

中庭委員長

最近では最寄り品もネットで購入する人も少なくない。そのような現状をどのように捉えているか。

大坪委員

コロナ禍ではネットで買い物をする人が増えている。自宅にいる時間も増えているため、受取に不便もないので、ネット通販に顧客が流れている。外食機会が減ったのでテイクアウトも増えたが、お取り寄せも増えている。結果、市内で買い物する人は減っている。コンビニエンスストアも含めて、小売業は厳しい状況になっている。キャッシュレス決済を進めても売上は回復しない。それよりもブランディングが必要だと思う。コンビニエンスストアでは地域のよさを商品開発に取り入れているところだが、小金井市ではブランドがなく、厳しいところである。地域のブランディングをしないと、市民が実感する地域活性化にはつながらない。今日紹介された事業も市民には認知されていない。

中庭委員長

ロゴなどを用いた横展開のブランディングは長続きする。検討するべきことだと思う。

今井委員

小金井市が産業振興のためのロゴをつくってもよいと思う。使い勝手のよい

ものをみんなでつくることも、検討の議題にしてもらいたい。

中庭委員長 買い物行動が変化していくなかで、小売業はかなり厳しい状況だと思う。ウェブサイトマイページのようなものがあり、自分のポイントが貯まるようになると、ネットショッピングをするよりもいいと思う人も出て可能性もあるだろう。

大坪委員 まちのポータルをつくらないといけないと思っている。インターネットでは、まちに限らず情報が目に入ってしまい、外に買い物に出て行ってしまう。まちの情報が目に入るようにしないといけない。ネットとリアルは融合する必要があると思う。

斉藤委員 二極化しているようにも思う。スマホなどをうまく使う人とそうでない人がいる。後者は今後5～10年ぐらいは減らないと思うので、買い物支援なども含めて物販を展開していくことも、ニッチではあるが可能性はあると思う。ここでしか買えないということはマストだと思うが、どうやって売っていくのがテーマだと思う。

中庭委員長 リアルとネットを融合させていくことは必要だと思う。商店街は、稼ぐ場であるとともに、生活を支える場でもある。相互に支え合っているものだと思う。それはリアルでないとできないことであり、スーパーマーケットにはない機能だと思う。

8. その他

事務局より、個別のヒアリングを依頼した。

9. 閉会（午後8時）